

街と育つこども園  
一点描画の空間を描くー

21719010 江崎 有咲  
指導教員 細井 昭憲 准教授

点描画 モンテッソーリ こども園  
共話 遊びと仕事 地域の公園

1 制作の背景

現代の社会では、それぞれの年代のコミュニティー同士が独立されていき、それぞれが交わる機会が減少している。特に幼いこども達が育つ幼稚園、保育所などの環境では、関係者以外は中に入ったり覗いたりしてはいけない。こどもたちの安全面を考えることも大切であるが、建築自体が地域の交流を阻害しすぎてしまっているのではないだろうか。また、育児の多くは母親の負担が大きく、保育教諭も若い女性の割合が多い。そのため生まれてから就学前の子供たちが育っていくうえで、若い女性以外にも多様な人と出会い、興味を持ち、学んでいく社会が必要であると考えます。

2 モンテッソーリ教育

モンテッソーリ教育では、こどもの見方、援助の仕方、環境の整備などを生理学や生態学の観点から提唱しており、自発的に興味を持って活動することを重要視している。しかし近代のこどもを取り巻く環境は、都市化や機械化が急速に進み、人工化している傾向にある。こうした中で成長するこどもは、本来人間が経験しなければならないことも経験しないまま大人になっていく。そのため、意図的にこうした経験ができる環境を大人が用意しなければならないのである。

3 点描画

点描画とは絵画の技法の一つで、線ではなく点の集合によって表現する方法である。一つひとつの点の大きさ、点の色、密度などを変えることで全く異なる印象を与える。点描画は一つの点だけでは絵画として成り立たず、たくさんの他の点と影響し合いながら集合することで初めて成り立つ。線画と点描画の建築について以下のように設定する。

線画の建築

設計者が建築の外形線を描き、その線画の内側からはみ出ないようにモノや人が塗られていく。線画の外形は固定され変わらないため、建築の機能や用途が変わることはない。

点描の建築

建築が固定された空間を用意するのではなく、点描画の点として捉えた建築、敷地環境、天気、時間、モノ、他者、自分といった存在が、他の点の影響を受け合い、時間をかけながら空間があらわになっていくような建築。内側から空間の輪郭をつくられていく。

4 共話と点描画

私たちの会話形式には、「対話」と「共話」というものがある。「対話」とは片方が文を完結させてから相手に投げかけ、他方はそれを受けてまた完結された文を話していくという会話形式である。それぞれの主体性は確立され、交わることはない。一方「共話」とは、対話と種類が異なる会話の形式である。片方が未完成の言葉を相手に投げかけ、他方がその意をくみ取って話を重ねて文を完了させる会話形式で、複数人で協働して文をつくる。

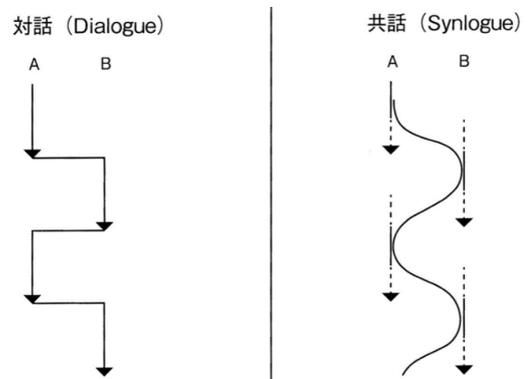


図1 「対話」と「共話」

[水谷 (1993) の図から筆者が再作成し、A と B の間の線を付け足した]

共話的建築

共話が未完成の言葉を投げ合って会話を成り立たせるように、建築、人、モノ、光などが協働して空間をつくる。自己の存在感から解放される共話的建築は、他者と共につくり上げることを前提としているため、様々な要素が連続的に関わっていく。そのため、描かれていく空間が少しずつ変化していく、点描画的な建築と言える。

## 5 設計趣旨

街と育つ認定こども園を設計する。このこども園はこども達、保育教諭、保護者だけではなく、学生、主婦、会社員、お年寄りといった様々な人が主体的に関わっていく、公共的なこども園である。ここでの多様な出会いから、こどもたちは自身の興味に基づき、遊びだけではなく仕事も学んでいく。こうした普段の生活で交わることのない人々が点となり点描画の空間を描いていく。

建築が固定された線画的な空間を用意するのではなく、点描画の点となった建築、人、モノ、光といった存在が、他の点の影響を受けることで空間があらわになっていく。このようにそれぞれの点が独立しながらも共話する環境をつくることで点描画のような空間を描いていく。

こうして建築家が描く空間の輪郭線が消えていくことで、どこからが建築がしたこと、どこからが人が作ったものなのか分からなくなっていく。建築の点はその時々に応じて誰かの印象を感じさせる媒体となり、そこを訪れる人やモノが新たな点を描き足していく。

## 6 設計敷地

敷地は東京都の豊島区立千早公園とする。周辺は住宅街に囲まれており、子育てで家族の世代から、高齢者まで様々な年代が住むエリアである。また、千早地域文化創造館、多目的ホールが近くにあり、昔から芸術活動がさかんな地域でもある。この公園という公共性が高い場所に、こども達以外にも、社会の様々な人たちが自ら自分の居場所を描いていける環境を設計する。こども達の安全のためには、閉鎖的な建物を建てるのではなく、街の人の目が行き届きやすいことが大切であると考えます。



図2 設計敷地と住宅街

## 7 設計提案

建築の点、人の点、モノの点、光の点の主な4つの点から描かれる空間を考える。これらの点は全てが動くのではなく、特に建築の点は動かないことを前提としている。点描画の空間を描くうえで、全てが流動的な動きをするのではなく、固定された点があるからこそ、その点と向き合って新たな点を描くことができると考える。こうすることで建築と自己が共話することができ、そこで生まれる空間に我々は自由を感じるのである。



図3 4種類の点

設計手法として、こども園の流れ、保育教諭と保護者の流れ、街の人の流れといった、3つのねじりながら絡まる流れをつくる。それらは、流れとたまりの場が交互に繋がっており、背景に見え隠れしながら人という点が連続的に動きモノを置いて居場所をつくる。そこに季節や時間によって移り変わる光の点も加わることで、建築に新たな点描画が描き続けられていく。

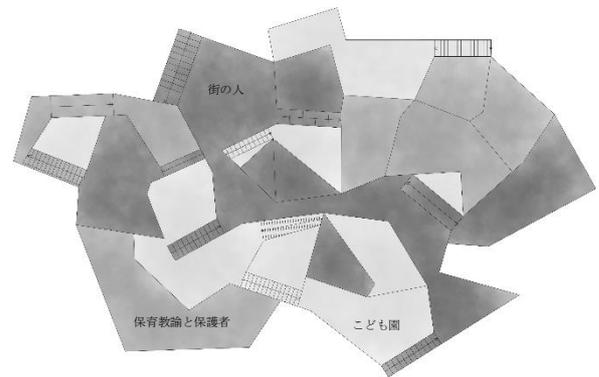


図4 設計ダイアグラム

### 引用文献

・ドミニク・チェン：『未来をつくる言葉 わかりあえなさをつなぐために』、新潮社、p.163, 2020年。(図1)

### 参考文献

・吉田正幸：『次世代の保育のかたち』、フレーベル館、2010年。  
 ・相良敦子：『親子が輝くモンテッソーリのメッセージ』河出書房新社、2015年。  
 ・ドミニク・チェン：『未来をつくる言葉 わかりあえなさをつなぐために』、新潮社、2020年。